

## アダルト熟女の近未来の性生活

### 近未来の不動産会社 OL

美山響子(よしやま・きょうこ)は、三十歳、不動産会社勤務、独身、身長百五十八センチ、88>59>89 のサイズで、通勤はフェラーリで通勤している。

満員電車では必ず、痴漢された。美山響子は男性の好みは限定されていたので、多くの男に触られるなど気分のいいものではない。もちろん、大抵の女性なら痴漢は気分が悪いものだが。それで、二千万円クラスの黒のフェラーリを現金で購入した。

インターネット検索で、フェラーリの販売店を探し出したのだ。フェラーリの公式ホームページから探せる。響子は

福岡市なので、福岡の販売店を探すと、一つしかなかった。

2013 年も一つだったが、2033 年の今もフェラーリの販売店は福岡市にしかない。なにせ、トヨタがレクサスなどの高級車の販売に力を入れたため、高級外車は昔ほど売れなくなっていた。

響子は帰宅すると高級マンションの最上階で、宅配ピザを注文する。

「春吉の美山です。」

「毎度ありがとうございます。」

名乗った後に、間を置くのはピザの店の人間がパソコンから美山の情報を呼び出すためで、これはもう随分昔から行われている。

S サイズのピザを二枚、注文した響子はフカフカのソファ

に座った。それから向こうの部屋にいる彼の体を思い出す。

彼は料理、洗濯なんてやってはくれないばかりか、自分で歩行するのもままならない体だ。

それでも一昔前の彼のタイプの・・・

ピンポンと、何十年と変化のないチャイムが鳴った。携帯電話の着信音なんて様々なものがあるのに、ドアのチャイムは何処も同じ、およそ建築関係の人間は発展性がないのだ。それが証拠とはいえるかどうか、日本の大手建設会社の起源は江戸時代の頃で、保守一点張りといえるのかもしれない。

玄関ドアを開けると、男子大学生アルバイトらしい青年が顔を出した。背も高く百八十センチはあり、フットボールでもやっていそうだ。響子は(ピザよりも、この青年の方がおいしそうだわ。)と思ったが、学生では面倒な事も多い。

「お待たせしました、ピザビッグです。」

ズボンと上着が繋がっている、いわゆるツナギの白い制服  
を着た大学生は

ピザビッグ!おいしさ二万倍。

と文字が印刷された白い箱を響子に手渡した。受け取って  
玄関脇の棚のところに置くと響子は、代金を払った。その  
宅配員の視線を胸に感じながら響子は、その男の股間を見  
ると白い制服に大きく張り出した格好になっている。(勃起  
しているのかしら)

「丁度、いただきました。ありがとうございます。」

深々と頭を下げた青年の股間を響子は注視していたが、ド  
アが閉まるまで張り出したものは、引っ込まなかった。

ピザビッグはSサイズも他の宅配ピザより、大きかった。

響子の好きなメニューの一つがウィンナーピザで、長さ二十センチのウィンナーを先に手にとって、男性のペニスを頼張るように口に入れる。

このウィンナーピザの注文は独身女性からが最も多かった  
ので、ピザビッグの経営者は、含み笑いをしながら、

「裏メニューを開発しよう。簡単だ。ウィンナーを男性器の形にするんだ。それをバイブ版、という形でメニューに載せる。メニューには、未成年のお客様は、このバイブ版は御注文できません、と但し書きは入れるようにする。さっそく、取り掛かってくれ。」

という発案に、開発スタッフが取り組み、できたものはバイブというより食べられるだけに松茸という感じの黒い大きなウィンナーだった。

今、響子が口に入れたのは、この裏メニューのバイブ版だ

った。

(まるで、男の大きなアレみたい・・・。)

響子の舌は、その男性器と同じ形に作られた、というより  
勃起時の男性器と同じに作られたウインナーの亀頭の部分  
を舐め回していた。亀頭のカリも舐め回していく。

TANNER の第五段階、の男性器をモデルにしている。すな  
わち、最終的に成熟した男の性器である。

響子は上着を脱ぎ、シャツも脱いでブラジャーを外すと、  
TANNER の第五段階である自分の乳房を揉みながら、ウイ  
ンナーをまるで男性の勃起したペニスにするように舌を這  
わせていった。

広い食卓に一人で座って、響子はウインナーにかぶりつく、  
のではなく、しゃぶりついている。

響子の白い大きな乳房は TANNER の第五段階のため、乳輪

は後退して見えない。

世間的に見られる AV などでの乳輪の大きな女性は、TANNER の第四段階であり、完全成熟とはなっていないのである。

空腹は、響子の想像を打ち破った。カリカリとウィンナーは、響子の口の中で噛み裂かれる。胃袋から伝達される感覚が、彼女を現実に戻したのだ。

(彼は、寝室にいたわね。ダブルベッドで寝てるけど。わたしがピザのウィンナーで、こんな事をしているのは知らないでしょう。)

そもそも、その彼との性生活に不満があるから、ウィンナーもビッグサイズのを求めるようになる。でも、それは彼のモノのサイズが小さいからではない。

ウィンナーを食べ終わると、ベッドに寝ている彼のビッグ

なモノを想像して響子は笑顔を浮かべた。

ピザが入っていた紙の容器をゴミ箱に捨てると、響子は寝室に向った。ドアを開けると、ダブルベッドの片隅で全裸の彼が寝そべっている。響子は彼の股間に真っ先に、眼をやる。ビッグ!ただ、それはまだ固くなっていない。

その彼は、同じ不動産会社の同僚だった。年齢も同じで、三年前に結婚した。半年ほどは薔薇色の結婚生活だった。

何が楽しいといって、仕事から帰って夕食を食べ、そのあとにすぐするセックス以外にあるだろうか。彼は大学時代、ラグビーをしていたのでタフだった。

響子を手早く全裸にしてくれて、先に全裸になっていた彼は、すでに怒髪天を衝くという言葉を変えて、怒棒天を向くという趣の姿態だ。



お互い立ったままの彼らは、響子が尻を向けて彼に寄り添う。彼は高く突き出した彼女の尻の間に見える大きな割れ目に、太く長いイチモツを突き入れると、響子の両脚を膝の後ろから両手で抱えて、空中に浮かせた。

駅弁体位の女性が、逆を向いた姿勢になる。駅弁体位の場合、女は男の肩に掴まったりするが、響子の今の体位は背中が彼の胸に密着して両手は空いている。

彼が響子の体を高く持ち上げるようにして、おろすという動作は騎上位を空中で行っている気になり、

「あっ、あっ、あっ。」

という悶え声を響子は止められなかった。空中に座ったまま、彼の雄大なペニスが出入りしている。それが、新婚生活で響子が最も好きな時間だった。

響子のマンコは締め付けが強く、セックスを終わった後、

彼のペニスを観察するとその皮膚が締め付けられて赤くなっていた。

それ位の締め付けだから、彼も五分と持たないことが多かった。

不動産会社も多種あるのだが、響子の勤めているところは主に賃貸物件の仲介だ。福岡市の中心に近いところにあるので、家賃の高い部屋が多く、したがって仲介を頼みに来る人達も少ない。

平日の昼間など、午前中もだが、客は一人も来ないことが多い。高い家賃を払ってまで福岡市の中心に引っ越したい人達は、東は神戸まで見当たらない巨大商業地の天神でビジネスとか店を考えている人達なのだ。

響子は一人で店にいる事も、しばしばだったので、逆駅弁の夫とのセックスを思いながら指はスカートの中に入れて、

パンティの上からマンスジを強くなぞって楽しむ事もある。

不動産の仲介店に行けば、どこでも座っている女性の下半身は見えないようになっている。だから、万一、客が入ってきてても響子は指を素早くパンティから離せばよい。

大手建設会社の受付も暇なことが多いし、人も通らない時間が多いと受付の女性はオナニーに耽る事もあるらしいが、響子は店のドアが開く瞬間に手を離して来客用笑顔を向けるので、気づかれた事はない。

響子の夫は営業に回されていたので、部屋も違い、顔を会社で合わせる事もなかった。

それでも、二人が付き合っている事は社内では知れ渡っていた。それは狭い世間というところだろう。響子と彼が、会社の休日にラブホテルに入ったのを見た社員がいたらしい。

休みの少ない不動産会社の休日に、二人はホテルで朝から晩までセックスした。

昼の食事も、そこそこのホテルに泊まるようになってからは、部屋に持って来てもらうようにした。その昼食を受け取る時だけ、彼が衣服を身につけた。大抵は若いホテルマンが、台車で昼食の上に布をかけて持ってきた。その時には、一発は響子の尻の中に射精していたし、入り口から見えないベッドで響子は全裸で寝そべっていた。

不動産会社の休日だから、水曜日、響子の会社も水曜日が休みだ。昼食を食べ終わった二人は、再び全裸で抱き合う。窓のカーテンも締め切っているけど、その外の下で空間では忙しそうに白いカッターシャツを着たサラリーマンが、歩き回っていた。

正常位で挿入しようとした彼に響子は、

「昨日のお客さん、案内した部屋の中で、さりげなく  
ど、わたしのお尻をむにゅーと掴んだのよ。」

と告白する。彼の勃起したイチモツは、響子の膣口の前で  
停止した。

「ええーっ、それだけか。」

「うん、それだけ。」

「よーし。おれがもっと、おまえの尻を愛してやる。」

彼は響子を、うつ伏せにした。大きな二つの乳房が、プル  
ンと揺れる。尻を高く上げた響子の股間には、大きな淫裂  
の線が彼の眼にイヤラシく映った。潤んだその長い割れ目  
に、彼は長大なモノを根元まで突き入れた。響子は尻を震  
わせて、顔を横向けにすると、

「あああ、すごく、いい。マンコ、気持ちいい。こすっ  
て!」

と淫らに悶えた。頬が紅色に染まっていた。不動産会社で働いている時の顔とは、別人のようだ。恐らく、A Vに出ても分からないのではないかと、思われる。

この頃のA Vはマンネリ化して売り上げも落ちてきていたのだが、テレビに出た、もしくは出ていた芸能人を出演させるという企画で、どうにか持ちこたえていた。狙い目は昔、大人数で歌っていたあの数十人単位のメンバーをどれか一人でもAVに出せば、昔のファンが必ず買うという現象がある。メンバーの二人を同時に出演させて、男優四人と絡ませる。そういう企画ものは、四十万枚もの大ヒットとなった。AVは昔からレンタルされるのが普通で、十万枚も売れば大ヒットだった。

昔のファンには、たまらないシリーズだった。握手をしたファンは、一人で二枚は買った人もいる。

傑作なのが、この元アイドルグループのシリーズものを三十枚買うと、誰か好きなメンバーとホテルで、しかも高級ホテルで一泊できるというものだった。そのシリーズのDVDに付いている応募券を集めて郵送すれば、東京のホテルまでの往復の旅費まで旅行券がついて好きなアイドルとの夜が過ごせた。大抵は三十過ぎになっていたメンバーが多いけど、その高級ホテルの従業員の話では、そのアイドルと泊まっている客の部屋では一晩中、灯りがついていて、その元アイドルの悶え狂う下品な悶え声が四、五時間続いて聞こえた、とか、朝、その元アイドルが蟹股でヨタヨタとホテルの通路を歩く姿が見られるという。

やはり一晩中、大股開きにさせられて、熱くなったファンのモノを受け入れていると股ずれが起きる事もあるらしい。元メンバーの中には、結婚しているものもいたけど、旦那

公認でその AV に出ている場合もある。その場合も、応募できるのでシリーズ累計二百万枚の売り上げを記録しつつある AV のミリオンダラー箱である。

オンデマンドという言葉があるけれども、これ以上に客の要求に応えたシリーズは過去には、なかったろう。

これらのシリーズものの売り上げは、低迷している CD 業界などには垂涎の的ではあったが、彼女等の悶え声だけを収録した CD も大した売り上げには、ならなかった。

彼女達が出る AV を AVB24 と称していた。アダルトビデオ部隊 24 の略だった。

結婚が決まるまで部屋に入れてくれなかった響子の彼、だったが、結婚が決まって、

「おれも包み隠さず、部屋を見せる。」



と男らしく公言するように話すと、薬院という福岡市の中心に近い場所の二十階立ての十五階に住む、彼の部屋に響子は連れて行ってもらった。

神戸の人口を抜いて、名古屋に迫ろうという福岡市でも高層マンションの建築はボツボツだ。それは郊外にまだ、土地があるからである。神戸の人口より少ない頃も、高層マンションを多く作るという発想は福岡市内では、あまりなかった。東京のように完売できるかという心配もあったと思われるが、新築のマンションはすぐに満室になったり、分譲マンションは建築中でも完売御礼が出るのが福岡市である。

十五階からの景色も、なかなかのもので、遠くには福岡タワーが見えた。1LDK の部屋で、DK も六畳あるので二人で

テーブルで食事ができた。彼がコーヒーを沸かしている時に、響子は巨尻と巨乳を揺らせながら彼の寝室に強行突入した。

壁一杯に並んだ DVD は、調べて見ると大半が AVB24 のものだった。

「一、二・・・四十枚はあるわ。」

響子が呟いた時に、彼が入ってきて、

「君との結婚が決まってからは、エロなものは買わないようになったよ。」

「でも、残してはおくわけね。」

「そ、それは・・・世の中、どうなるかわからないし・・・。」

「じゃあ、わたしとの結婚も不確実なのかしら。」

「そうではないと思うけど、エロ DVD は勉強になるよ。体

位とかも参考になる。」